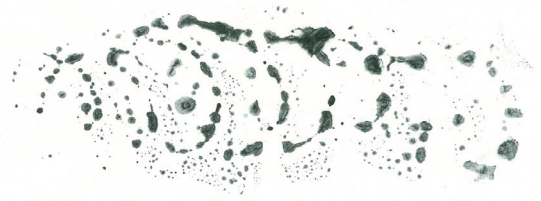


人事の哲学



人事の哲学

大転換期を支える中国古典の智

第十一話

今や世界経済を左右する存在となった中国市場。
欧米型ビジネスルールが通用しない
この国と付き合うための要諦とは



田口佳史

Yoshifumi Taguchi_東洋思想研究者。株式会社イメージブラン代表取締役社長。老荘思想的経営論「タオ・マネジメント」を掲げ、これまで2000社にわたる企業を変革指導。また官公庁、地方自治体、教育機関などへの講演、講義も多く、1万名を超える社会人教育実績がある。最近の著書に『論語の一言』（2010年 光文社）、『清く美しい流れ』（07年 PHP研究所）。08年には日本の伝統である家庭教育再興のため「親子で学ぶ人間の基本」（DVD全12巻）を完成させた。

2010年9月に尖閣諸島における中国漁船衝突事件が起きて以来、日本では中国に対する警戒感や嫌中感情が高まっています。中国市場の成長をにらんで戦略を立ててきた企業も、中国依存の見直しを進めています。ここで大切なのは、「中国とはいかなる国なのか」「中国人とはいかなる人々なのか」という点を改めて深く考え、学び直すこと。それなくして、対中国の政治も経済もあり得ません。そこで今回は中国古典を通じて中国を理解する手立てを紹介しましょう。

中国史を理解すれば
驚くことはない事件

窮すれば、すなはち變ず。變ずれば、すなはち通ず。通ずればすなはち久し。（易経）

「窮すれば、すなはち變ず」とは、

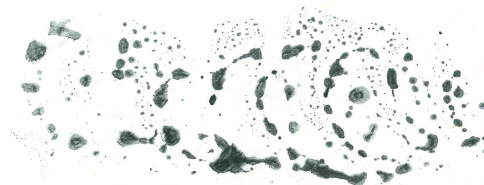
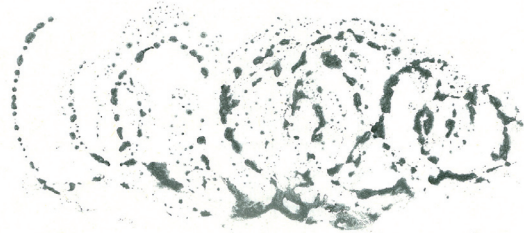
あることが極まると自然に変化が起きるという意味。それによって初めて、道が通じ円滑に通ることができるのだと中国では考えられています。ここで言われているとおり、中国では伝統的に、行ったり来たり変化するのが当たり前のことなのです。

中国の歴史を丹念に見ていくと、中国人の両極に変化する考え方がわかってきます。国家が優勢であればあるほど「陽極」へと寄っていく。他国から見れば傲慢、横暴な帝王のごとき態度に出るわけです。逆に劣勢になると、「そんなに卑屈にならなくてもいいですよ」と言いたくなるほど腰が低くなります。

近代中国史を見ていくと、阿片戦争に敗れて香港を割譲、2000年に返還されるまで約160年もの間ずっと西洋列強に支配される屈辱を味わいました。中国の歴史上、この約160年間は最も劣勢にあった時期です。

Text = 千葉 望

Photo = 鈴木慶子、新井啓太（書画）



劣勢にあった時の中国人は、実にいいところばかりが出てきます。謙虚で控えめ、相手を立てて教を乞う。いわゆる「いい人」です。

ところがひとたび国が隆盛の時を迎えると、ぐうっと反対の極に移動します。一例をあげれば、清の乾隆帝が即位した時期は、「地球は自分たちで持っている」という態度を示し、西欧列強にも朝貢外交を求めました。その結果、阿片戦争を招いたことは歴史の皮肉といえます。

日本人はそろそろ「中国対日本」が本来の形に戻りつつあることを自覚すべきです。もともと中国から見れば日本は小さな国。この160年間が異例だったということ为前提として考えなければなりません。日本が経済強国として中国に大差をつけていた時期は、こちらも鷹揚に構えることができました。これからは反対です。常に緊張感を持って中国に接していくことです。

意識を変える必要性をズバッと見せられたのが今回の事件です。中国はそもそもが「中華思想」の国、世界の中心に自分たちがいると信じて疑いません。日本など、彼らから見れば「東夷」の国にすぎないのです。

これからが日本の正念場。隙を見てさっそく中国にすり寄りロシアのような国も出てきました。それに怯えるのではなく、直視することです。

わざわざ中国を敵視する必要はありません。お隣の国であることには変わりないのですから、ここはなんとしてもうまくやっていく必要があります。現代の日本人は、日中の国力が逆転していたここ100年ほどしか知りません。中国とはそれほど甘い国ではない。時と場合によって右に行ったり左へ行ったり、「ご都合主義」を通す伝統を持っているのだとしっかり理解してください。

常に「死」を思う日本
現世の楽しみを求める中国

君子は豹^{へう}變^{へん}し、小人^{せうじん}は革^{くわく}面^{めん}す。(易経)

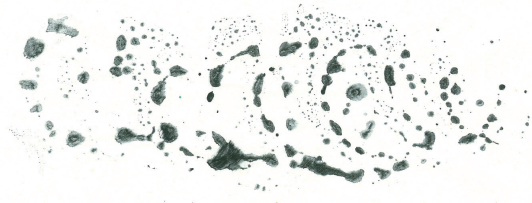
日本人にもよく知られている一文でしょう。状況によってがらりと変わるのが君子。時代や社会の状況を読み、変えてこそ君子と考える中国とは、長期的に付き合うことはなかなかむずかしいものです。

そこで、中国で仕事をする人たちにアドバイスを1つ。ビジネスを進

める際には、長期ではなく短期で物事を進めることです。プロジェクトを進めるときには、完了まで5段階ぐらいに分けて契約を結び、その都度、法で守られるようにしていくとよいでしょう。「中国人には契約の概念がないのか!」と怒る人がいますが、「彼らは豹変する人たちなのだ」という前提に立てばよいこと。長期の展望はむずかしくても、短期の展望なら安全です。

身近な例では、中国の日系企業の人が「せっかく育てた現地の人材が、わずか100元給料が上がるからと転職してしまった」などと嘆くのを聞くことがありますが、それも当然です。彼らは、実力が上がったのだから旧来の条件のままでは許しがたいと考えるのです。

同じ東洋の国でありながら、日本と中国には大きな違いがあります。日本人はとかく「死」に惹かれがち。仏教は現世否定の宗教ですし、早く西方浄土へ生まれ変わりたいと考えます。仏教が生まれたのは自然環境の厳しいインドだったこととも関係があるでしょう。ところが気候風土に比較的恵まれた中国の思想では、儒家や道家を含めて、「この世は素



生

同じ東洋の国でも、日本人は常に「死」を思い、
中国人は「生」を楽しむことを求める。

晴らしい」「なるべく素晴らしいこの世に長く暮らしたい」と考えます。人生を楽しむことに貪欲なのです。

知者は楽しみ、仁者は壽し。(論語)

ここでは人生を楽しむだけではなく、長寿が前提とされていることがわかります。長寿を得て、しかも楽しもうとすれば前提となるのはお金。「いつから中国人はあんな拝金主義に？」と首をかしげる方もいるでしょうが、彼らは生きることを楽しむための終生の所得を求めているので、お金が優先されるのです。日本は何気なく長寿国家になったものの、世界一の長寿を謳歌しているとはいえ、老後の心配ばかりしています。

敢へて死を問ふ。曰く、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんと。(論語)

まだ生を知らないのに、なぜ死を知ることがあろうかと孔子は言いました。日本人が「死」について考えている間に中国人は楽しい時間を問う。そう言われて2500年たっているのですから、彼らに変われというのは無理でしょう。従って、中国人の人事は「現在現実主義」でいくべきです。それは彼らの強烈なリアリズ

ム。紀元前2000年からきている古典思想の定点なのです。

人間の救済は神仏によってならず、人間によってのみ可能であると彼らは考えます。その原点は、古代中国で繰り返した洪水にあります。人々は洪水に苦しめられていましたが、治山治水に長けた禹が現れ、夏王朝を開いたといわれています。中国では伝統的にリーダーに対する要求が厳しく、今で言えば中国に訪れている絶好のチャンスを生かせるかどうかでリーダーを評価します。中国の為政者たちは、160年ぶりに巡ってきたチャンスを生かせと徹底的に要求されているのです。国内世論のために政治をやらざるを得ない状況といえます。

中国に対抗したいなら
中国史を徹底的に学べ

中国人は160年前になぜ西欧列強にやられてしまったのか、よく研究しています。導き出された答えは「産業革命」でした。近代兵器を持った西欧と持たなかった中国との差を痛感し、二度と同じことがあってはいけなと、国家の強化に走っていま

す。新しい武器、新しい産業、新しい先端技術。具体的な国家戦略を立てるための人材育成にも非常に熱心です。アメリカの有名大学や大学院では、中国人留学生が一大勢力となっています。このような21世紀性を持った中国人がやがて本国に帰っていく。低コストの生産請負地域という感覚は、彼らにはまったくくないでしょう。早く世界の先端技術の集積地となって、煮え湯を二度と飲まされないようにと固く決意しています。

中国は驚異的に各分野において、急速に技術を蓄えています。しかし、それを形にしなければ産業にはできません。形にするには資源が必要です。加工・生産するエネルギーも必要です。今、彼らが資源確保に狂奔するのはそのため。いずれ中国企業が日本企業を使ってモノを作る時代に入るでしょう。今の日本人は悪く言えば中国を下に見ていますが、近いうちに対等、逆転するかもしれないと危機感を持って国家戦略を用意することです。

恆産無ければ、因って恆心無し。(孟子)

倫理や道徳は、暮らしが成り立ってこそそのもの。これが中国のリアリ

「生」という字は草木が大地から生える様子を表したといえます。地上に顔を出した芽はか細く不安げですが、地中には立派な根があり、硬い岩間をもろともせず這い上がっていく力を備えている。人が生きる様もまさにそのようだと思います（一舛氏・談）



ズムです。彼らは今「恒産」を徹底的に築いている最中といえましょう。

中国人の偉さは、歴史に学び、直近に犯した失敗を絶対に生かすことです。翻って日本はどうだったか。戦前の失敗を戦後はすべて否定しましたが、その失敗を深く研究したのか。日本人が反省すべき点です。

隋主先づ在下に命じて、多く獻食を作さしめ、獻食多からざれば、則ち威罰有り。上の好む所、下、必ず甚だしき有り。競ひ爲すこと限りなく、遂に滅亡に至れり。（貞観政要）

これは、隋がなぜ滅びたかを、唐が学んでいる一文です。このように常に歴史に学び、陰陽の両極を行ったり来たりしている中国。彼らの体の中にはさまざまなことが混在していて、いつ何がどのように出てくる

のかつかみきれません。しかし、中国を相手に仕事をしていくなら、こういう中国を勉強することが重要で。これまでは日本国内と同じ感覚でもやっていけました。なぜなら彼らは、はらわたが煮えくりかえていても表には出さない老獪さがあるからです。

これからは違います。今回の事件でもさまざまな問題が噴出しましたが、そもそも日本のリーダーたる人たちは中国史を勉強しなさ過ぎです。日本人は驕りをなくし、中国の歴史を学び、彼らが「今日」に生きる人々であることを理解しなくてはなりません。ビジネスの現場では「今日」の話を積み重ねていくことを心がけ、現在現実主義の彼らに立ち向かってほしいと思います。



書・題字 = 岡 一舛（おか いっそう）

国内外で活躍中の現代書家。「絵のような書」を模索し独自の創作活動を行っている。パリ国際サロン創立会員、毎日書道展会員
<http://www.issso-art.com>

受賞実績

- 1997 第30回現代書展／大澤賞（最高賞）
- 1999 スペイン美術賞展（バルセロナ）／優秀賞
- 2001 日本・フランス・中国現代美術世界展／中国美術家協会賞
- 2002 第35回現代書展／大澤賞（最高賞）
- 2003 イタリア美術賞展／優秀賞・プレスキッド賞、第11回パリ国際サロン／ザッキ賞
- 2005 第13回パリ国際サロン／最高賞、サロン・ドートンヌ展（パリ）／入選（以降07年、08年、09年も入選）その他多数